



【写真1・2019年12月】

2020.01 Monthly Report

渋谷駅周辺再開発3年間のプロセスを振り返る 駅周辺から再開発は広域エリアに広がっていく

～多士済々の脇役陣が魅力的な広域渋谷エリア～

☆渋谷駅周辺は広域渋谷エリアの玄関口

先週号の本紙では正月特別企画のプチ特集として、「新国立競技場の出来るまで」を写真中心に構成してみました。本紙では旧国立競技場の解体が始まった2016年度からずっと、新国立競技場が出来るまでの過程を定点観測し、紙面でご紹介してきた。

今週号の本欄では、2016年度から定点観測してきた「渋谷駅周辺再開発事業」のこれまでの定点観測の記録の一部を、改めて写真構成してみた。

その前にここでもう一度、「100年に1度」ともされる渋谷駅周辺の再開発事業のあらましを整理しておきたい。それは2012年4月、旧東急文化会館跡地を中心に渋谷駅前で初となる高層ビル《渋谷ヒカリエ》の開業から本格化した。



【写真2・2016年12月】

その後、東横線渋谷駅の地下化および地下鉄副都心線の相互乗り入れ（2013年3月）を挟んで、他の高層ビル建設プロジェクトが始まる。その結果誕生したのが、2018年9月完成の《渋谷ストリーム》《渋谷ブリッジ》、2019年11月完成の《渋谷スクランブルスクエア》《渋谷フクラス》などだった。

これらの建物の諸元はこれまで何度となくご紹介してきたので繰り返さないが、現在進行中の渋谷スクランブルスクエアの第Ⅱ期工事（2027年度開業）、渋谷桜丘口地区の再開発工事（2023年度竣工）の完成によって、渋谷駅周辺の再開発事業はとりあえず終了ということになる。

しかし、渋谷駅前の再開発事業は渋谷広域エリアの再開発という視点で見直せば、渋谷広域エリアの「顔（拠点）づくり」という位置づけが浮かんでくる。

渋谷駅を中心にその周辺地区を網羅する渋谷広域エリアという意味では、さらに原宿・表参道・青山・代官山・恵比寿などの再開発と併せ、非常にスケールの大きな都市計画へと繋がっていく。

都心部では新宿エリア、池袋エリア、品川エリア、丸の内エリア、大崎エリアなど、同様の都市計画的レベルの再開発事業が目白押しだが、エリア開発を構成する「エリア内盛り場」の都市的な魅力という意味では、渋谷駅周辺を核にエリアを構成する豪華な脇役陣（原宿・表参道・青山・代官山・恵比寿など）を擁す